

## 第1分科会

### ◇質疑◇

Q：地域のメンバー90人は、どんな人がどんなことをしているのか。

A：メンバーは先生や行政職員、大学生など。レインボープロジェクトは高校生が活動しているが、センシティブなテーマの中で、メンバーの方々には温かい見守りや助言などを担っていただいている。高校生発信のLINEで共有。(Facebookやインスタグラムも)

Q：ロールモデルとなる大人と中高生の関わりはどのように行っているか。

A：「大人の話聞く会」で、サポートしている大人が「どんな経歴で今に至るか」などを話す機会を作っていた。高校生がUターンに対するリアリティを持てること、宮古市に居続けることに繋がっている。

Q：「地元修学旅行」という企画の日程や運営費について詳しく教えてほしい。

A：日程は色々で長期休業中に1泊2日で行くこともある。宮古市の産業や仕事、自然等が多く、行先は観光部署にもアドバイスをもらって決めている。民間の助成金や県の補助金、参加費などで運営している。

Q：行政との関わりは。理念やビジョンをどのように共有しているのか。財政面は。

A：宮古市との関わりは年々増え、教育委員会、企画、産業振興の3つの部署の方と話すことが多い。教育・産業人材の育成、企業の支援など幅広く捉えられているので、課題の解決ができるような提案をしていきたい。財政面は脆弱だが、宮古市から一部補助金をいただき、共同で進める事業もできるようになった。

### ◇研究討議◇

Q：「マチナカペイント大作戦」について注意点などを教えてほしい。企業の協力謝礼は。

A：マチナカペイント大作戦はデザイン事務所が企画したジモト大学のプログラムの一つ。図書館は公共物であるため、所管する社会教育課へ説明し、課題を共有して実施した。プログラム実施先にとって高校生と一緒に活動することが有益だと思うことをプログラム化しているので、経費は全てプログラム実施先が負担している。

Q：最近の高校生・大学生は大変多忙だが、社会貢献への意識が高い印象を受ける。過剰な期待をされている中、高校生・大学生の感覚とのミスマッチはないか。コーディネーターはどのようにバランスをとっているのか。また、高校・大学を卒業し社会人となるが、お二人が関わったケースで、地元への就職や起業などがあれば教えてほしい。

A：大人や社会から過剰な期待感があっても地元には縛り付けたくない。高校生に多様な意見に触れる機会を用意し、コーディネーターは中立が大事。就職に関しては、宮古市の場合、大学卒業人材を受け入れる企業が少ない。新卒者は、市役所職員や地域おこし協力隊として働いている。都市部の大企業に入っても「いつかは戻って起業したい」と言ってくれる人もいる。地元企業が新規事業の開発をする機会などを捉え、インターン生の紹介などを行い、大学卒業生の就職の受け皿に繋がるようコーディネートしている。

A：高校生の伴走の大変さは感じている。最近、高校生から自分たちでジモト大学のプログラムを提供したいという意見があり、地元の企業に協力をいただきながらプログラムを開発している。ジモト大学は高校生にとって社会活動の入り口。ジモト大学経験者の進路については、今年で5年目なので実績なし。新庄・最上は、以前から高校生のボランティア活動が活発であり、ボランティア活動に関わった高校生が行政や地元企業に就職している例がいくつもある。

Q：どちらも大学がない地域だが、もし大学が存在したら現在の活動は実施していたか。

A：実施していない。この活動は、地元に戻ってこないという課題感から始めたので、大学があり、若者も多ければ、その課題に気づかなかったかもしれない。

A：以前に比べて、高校生の学びの場が地域に広がってきていると感じる。大学があったとしても、地域の力を確保しながら小中高校生に学びの場を提供することは必要だと思う。

Q：魅力的な地域とは。

A：人が前向きで、個性豊かに繋がりがあがる地域。幸せに暮らしている地域が1番だと思う。

A：帰りたいたいと思える地域、外に出ても地元を人に自慢できる地域が魅力ある地域。

Q：高校生企画に難しさを感じる。ニーズを捉えるためどのような努力をしているか。

A：ジモト大学ではコンソーシアムの中に高校も参加。高校も忙しいが、先生方に関わって

もらうことで、探究学習のニーズを掴んでいる。高校生自身のニーズ把握も行っている。  
A：高校生の感覚と乖離しない活動にするため、若いメンバーに当たってもらえればと思う。現実的な関心事としては進路。学校との協力関係を築きながら把握したい。

#### ◇助言・講評◇

- ・人口減少、若者流出。高等教育機関が少ない。地元へ帰ってきてもらうため、高校生や若者を対象として、地域理解、特に地元の資源、地元の仕事の理解を図るための活動である。
- ・生業の問いが大事。調べた際に魅力的な仕事がないと感じると帰ってこないことがある。
- ・どちらもコーディネートを実施。異なる組織を同じ土俵に乗せること。ここでしかできないことを実施。当事者双方の自己決定権を尊重した上で繋がっている。また、ファシリテーションで学習者の合意形成、エンパワメントを促進。それには伴走性が必要。リーダーシップは時に独走、失速も。対象者と日常的な関係を構築、最初はリーダーシップを発揮するが、徐々に自立を促す。2事例とも、合理性に特化せず、ゴールフリーで活動してきた。
- ・70年代ぐらいから、社会教育では教室・講座からサークル化することが理想と言われてきた。サークル化した際に、加齢に伴い活動が低下していくのは仕方がないことである。その際に、もう一度組織を作り直す必要があるが、行政職員は頻繁に異動があり、スキルの蓄積が難しい。NPOなどの団体のほうが伴走性を発揮できるのではないかと感じる。(高橋さん)：図書館ボランティアや司書など、女性が多く参画しての組織で、女性主体の強みである。団体名はトライアングルに由来しており、安定する。高い専門性を持っている。
- ・「総合的な探究の時間」でキャリア教育とのマッチング。多種多様な働き方を体感できる。
- ・早川さんはストレンジャーとして宮古市に入り、目立つ人(トリックスター)から宮古市と市外の境界に立つ人(マージナルマン)となり、今後はよりセンターになってくると思う。その立ち位置の変化で責任もかかってくると思うが、その変遷を経て、どう感じているか。(早川さん)：若者(ストレンジャー)の時は、損得勘定なく動いていた。トリックスターの時は、客観的な視点で、若者として様々な人と関わることができた。周りの人が協力してくれて、実践するほど地域の課題の中核を担うところで活動できているのかと思う。
- ・青年活動は、10年周期で停滞と活性化を繰り返す。若い人が盛り上がった活動は熱量が高いため、下の世代が入りにくい。その後、結婚・出産などで活動が続かないようになる。10年周期で別の若者が活動を始める。支援する大人はその流れを理解する必要がある。
- ・山形でNPOが解散していった時の代表の発言に「若者の代表と思って活動していたが、若者ではなくなったため、活動をやめる」という発言があった。そうなると支援者と若者が繋がらなくなり、関わりがなくなっていく。それを助けてくれるのが循環性である。関係人口として関わってくれる。その仕掛けをどうしていくか。

#### 終わりに

##### ○次代へのプレッシャーorインスパイア

- ・世のため、地域のため、人のためも大事だが、「自分のため」から「自分たちのため」そして「地域のため」と私事性から公共性へ変わっていく。「自分のため」「自分がしたい」と思ったことから活動を始めていいのではないかと感じる。お二人は、こういったことがあったか。(高橋さん)：私は図書館についてのことが自分の優先順位が高い。図書館をどうにかしたい＝自分のためになるのではないかと感じている。(早川さん)：震災当時は、「世のため」＝「自分のため」が一致していたのが、当時の高校生である。しかし、年々、震災の部分が薄れている中で、地域のためが前面に出るのは健全ではないと感じている。自分のためを突き詰めていきたい。その上で、個性が認められ、ゆくゆくは地域のためになる寛容性を大事にしたい。
- ・日常の居場所となる場や施設の確保が必要。若い方々の活動の前提になると思う。
- ・スポンサーも、拙速に数値のみで評価しないこと。
- ・予算の確保は、ここでしかできないことをウリにすること。